

荒行堂という修行現場を通して

正中山遠壽院荒行堂傳師 戸田 日晨

「修行」に潜む「落とし穴」

「行ずる」根本に「懺悔」が不可欠

(1) 行堂改革と重なり合うオウム問題

オウム真理教事件について私が述べられることには限りがありませんが、「荒行堂」という日蓮宗の僧の修行道場において、行僧時代から現在の「導師」職に至るまでの45年間の経験を踏まえて、「修行」という共通テーマを基に話してみたいと思います。

まず、遠壽院荒行堂における「寒百日荒行」の内容について簡単に説明すると、荒行堂に入行した加行僧(以下「行僧」)の日課は概ね次のような次第になります。

①「午前3時に始まり午後11時に至る迄の1日7度の水行」、②「水行時以外は読経堂における法華経誦誦三昧」、③原則「粥と味噌汁を主体とした1日2度の食事」

この行は発祥以来400年以上の歴史があり、毎年11月1日の入行で始まり、寒中百日間修されて

論

地下鉄サリン事件から25年

⑦



とだ・にしん氏1953年、東京生まれ。國學院大文学部哲学科卒。現在、正中山遠壽院荒行堂傳師、遠壽院総合修法研究所所長。

「他者を許容せず」に危惧

自己肥大化、「問題僧」に共通

紙数の関係上、改革内容の詳細をここで述べることは控えますが、大雑把に説明すれば「行僧」の中には、人格形成上、非常に歪んだ精神構造を持つ人が近年、目立つようになった。このような行僧の存在が「修行道場」という場所においては他の同行僧はもちろん、道場全体にも肝心の当人が全く意識しないという状況下、大変

来ない状態に落ち入り、修行者としては相当自己矛盾する状況となっているのではないかと、考えざるを得ないという特徴があります。

また私は、世間的思考、知識的なのを「目頭から外して」「行」をするという行為の立脚点を考えます。表現の仕方としてはどうかと思いますが、自身の中に確固とした或る種の「美意識」を保つ必要がある、と常日頃感じて

荒行を志す行僧一人一人のことを考えても、人それぞれの生育環境や生まれ持った気質による「苦しみ、哀しみ」を有することは自然の成り行きともいえます。

私共「行の世界」の体験から培われる重要な要素として、「文字情報」とは異なる「直感情報」というものが考えられ、この「直感力」または「感応力」という目には見えない波動的な存在が、実は「近代合理」「二項対立」的な思考概念を否定するのではなく、むしろステップアップした形で現実世界に對し得る重要な方途ではないかと、考えております。

その中で藤樹の言葉(註2)として、「谷の窪にも山あいにもこの國のいたるところに聖賢はいる。ただ、その人々は自分を現さないから、世に知られない。それが真の聖賢であって、世に名の鳴り渡った人々は、とるに足りない」とあります。この藤樹の言わんとする所を、私は「荒行堂」という「行の現場」から得た「直感的共鳴」のことばとして、「修行」という人間行為の持つ「落とし穴」に落ち入らぬ様、自省の思いと共に心の奥底に留め置きたいと強く思っています。

が、現在私は「行堂改革」の方針で、荒行堂を巡る内外に亘る改革改善方策を打ち出し、意識を同じくする方々と共に改革実践に取り組んでいます。

な悪影響を及ぼす。その改善策を模索しながら進めている」ということです。

「行をする」というのは、世間的な思考概念から自身を解放することともいえます。また逆説的になりますが、「行をする」に至るまでの過程においては、「健全な思考生活」というものの深みある蓄積も、或る意味で基盤とならなければならぬと思えます。

オウム真理教に目を転ずれば、事件当時数々のメディア報道等で紹介された「修行」と称する様態は、例えば「ヘッドギア」「水中クンパカ」などに象徴されるように、まるで「修行サーカス団」の様相を呈しており、尚且つメインドコントロールによって「この教団だけが正しいのだ」と信じ込ま

オウム真理教に関しては事件発生前から、謂ゆる「アカデミズム」の方々も色々な形で関わって来られたことを承知して、私が、事件発生後、最終的には「戻れトンボ」で終わり、その後は一切関係が無かったかのよう

としようとしても、ここが要点ではないでしょうか。更に「直感情報」とは、自身の傲り、高ぶりの「慢心」に気づき、それを払い落として進む過程において、「真の自己」を自ら自然に敬つ心が生じた時に得られるものだと思います。「仏の道」にも通ずる道理ともいえるのではないのでしょうか。

(2) オウム真理教事件と宗教研究の世界

オウム真理教に関しては事件発生前から、謂ゆる「アカデミズム」の方々も色々な形で関わって来られたことを承知して、私が、事件発生後、最終的には「戻れトンボ」で終わり、その後は一切関係が無かったかのよう

「この「身体技法」としての「伝統修行法」には、「返復動作」の繰り返し、という特徴があります

(註1) 藤樹の言葉 『代表的日本人』 内村鑑三著、鈴木範久訳(岩波文庫)

「人」としての精神構造の基底部分が欠落したまま年齢のみを重ねてしまった謂ゆる「問題僧」に共通して見えることは、「自己肥大化」した思考のみが優先され、決して「他者を許容する」ことが出

「梨の礫」で通ずる研究者がいま

私共「行の世界」の体験から培

「善」と「悪」の二元論を

「二項対立的な思考概念」

苦しみ・哀しみ 向き合うことが重要

合掌